The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒュームの「手品」 : 共感概念に関する一考察
Author(s)	高原, 雅人
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1986, 20, p. 33-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒュームの「手品」

―共感概念に関する一考察―

高原雅人

序

「等しく結ばれた弦に於いて一本の動きが他の弦に伝わるのと同様に、全ての情感は素早く一人の人間から他の人間へと移り、あらゆる人間の内部に対応した動きをもたらす。[1]」

これは「弦の比喩」として知られる一節であり、「鏡の比喩」と共に『人性論』A Treatise of Human Nature の共感 sympathy を特徴付けていると言われるものである。『人性論』の共感が受動的な、情念の感染を支える人間本性の性向に過ぎぬものであり、我々の援助行為への動機を構成する要素ではない、消極的な「情念の伝達原理」Principle of communication of passions であるという解釈はここから出てくる。

こうした共感像は、共感を人間性 humanity・一般的仁愛 general benevolence という根源的本能 original instinct と位置付けた『道徳原理研究』[2] An Enquiry concerning the Principles of Morals と際立った対照をなし

ている。ここからいわゆる『人性論』と『研究』における共感概念の変化の有無という問題が出てくる。しかし、ヒュームは共感を明確に定式化しているわけでなく、二つの著作での共感記述にも多くの類似点が認められる。

以下の考察は『人性論』の共感概念の検討を目的としている。特に拡大的共感 Extensive sympathy の情念としての性格と「情念の伝達原理」としての共感がもつ非・情緒性とをどのように理解するかを中心に据えた。換言すれば、『人性論』の内にある『研究』的な共感が、ヒュームの連合心理学的説明によってどこまでカバー出来るのかを問題にしている。結論的にいえば、能動的な情念としての共感の導入は、「手品 sleight-of-hand」と評されるように、ヒュームは必ずしも成功していない。この理由を小論では情念論がとっている連合心理学的説明の限界へと遡ることによって、明らかにしようとした。

一　情緒的感染 Emotional Infection

まず、『人性論』の中で頻繁に現れる共感像を明らかにしておこう。共感が最初に導入される一節で、ヒュームは次のように書いている。

「いかなる人間本性の性質といえども、……他者と共感する性向、即ち伝達によって他者の傾向や感情を受け取るあの性向ほど驚くべきものはない。」(316)

ここで、ヒュームが念頭に置いている共感は次に挙げる事例の中によく示されている。

「快活な表情は私の心の内に顕著な満足と落ち着きを吹き込む。」(317)

「気立てのよい人物はただちに彼の友人と同じ気分になる。」(317)

共感は他者から自己への情念の伝達を支える人間本性の性向であり、文字通り「情念の伝達原理」なのである。

「大抵の場合ヒュームは共感を一種の情緒的感染 emotional infection とみなしている」とマーサーが書いたのは、この共感像を念頭に置いているからである。[3] 情緒的感染はマーサーによれば「非認識的同類感情 non-cognitive fellow-feeling」の一種であり、「動物的共感 animal sympathy」とも呼ばれるように群れをなす家畜や群衆に見られる情緒経験の分有である。これが非認識的であるのは「自己意識の能力を前提にしない」からであり、他者の内的・外的状況の知識が不要な、不随意的な現象だからである。従って又、この種の共感は援助行為へと我々を促すような「実践的関心 practical concern」をも含まない。

ここでは、『人性論』の基本的な共感像がきわめて受動的な情緒的感染として定式化されうるという点を確認しておきたい。『研究』の共感が仁愛や人間性といった援助行為への動機を構成する因子として理解されていることを見るなら、『人性論』の共感の異質性は明らかなように思われる。[4]

しかし、我々はさらに進んで共感の心理学的説明を見なければならない。共感が情緒的感染という色合いを帯びる背景に、それが強く働いていると考えるからである。そこで、冗長になるのを厭わずヒュームの所説を引用することから始めよう。

「何らかの感情が共感によって吹き込まれる時、それはまず結果によって、即ち表情や会話の内にある外的徴表によってのみ知られる。それらがその〔情念の〕観念 ideas を伝えるのである。この観念は直ちに印象 impression に変化する。つまり、当の情念自身になるほどまでの度合いの力と活気とを獲得し、もとの感情と同じ情動を生みだすのである。観念から印象へのこの変化がどれほど瞬間的であっても、それはある観察と反省とから生ずる。」

(317)

以上が共感の成立過程の大枠である。他者の情念が同定され、観念として知覚される過程とそれが印象へと転化する過程が、共感の知覚レベルでの叙述である。

他者の内的状態はヒュームにとっては、直接観察不可能な私的事象である。表情などの公的な事象はこれと因果的に結合する偶然的・経験的な関係にある。従って、共感の第一の過程には、よく知られた認識論的な問題が生ずるが、ヒュームにはそれは問題として自覚されていない。これは、Human Nature の斉一性を確信しているからである。

観念として知覚された他者の内的状態が、自己のそれへと変化する過程をさらに見てみよう。

「明らかに、我々自身の観念あるいはむしろ印象 the idea, or impression of ourselves は常に親しく我々に現前している。そして、我々の意識は我々自身の人 person の非常に生き生きとした想念を与え、この点で何らかのものが、それに優ると想像する事はできないくらいである。従って我々自身に関係するあらゆる対象は先の原理によって、想念の同様の活気を伴って見られることになる。」(317)

かくして、観念としての他者の情念は、「自己」の印象の活気を分有することによって印象化する。そして、これは自己と他者の関係〔自然的関係〕をベースにした連合 association を媒介にしてなされる。

このように、共感を想像力の連合機能へと還元することは、第一に共感を心理的なプロセスとする事であり、心的事象の内実を構成する知覚としての共感を退けることである。さらに、この事は「情念」としての共感を、従って仁愛としての共感をも退けることである。第二にこの説明は、先に述べた「情緒的感染」の性格である不随意性

と非実践性とを共感規定の本質的な要素として定立することを示唆している。機械的な「観念→印象」の移行は、直接、共感者の意図的な操作を許さない必然性をもって生ずるものであるし、他者の情念の存在も「一般規則 general rule」による連合を基礎としている。他者は共感者にとって、連合の手掛りとなる一契機に過ぎず、他者の代わりに犬や猫でも、このプロセスは作動するのである。

二　情念論の基本的性格

『人性論』の共感はこれまで見てきた様に、情緒的感染という表現に合致した性格を強く持っている。共感に関する直接の記述から、これ以外の共感像を取り出すことは難しい。そこで、情念論全体に視野を広げて考察してみよう。情念論の基本的な性格と共感の受動的な性格との間に本質的な関係があると思うからである。

ヒュームの情念論はしばしば指摘されるように、デカルト的な情念観を基底に置くものである。情念は純粋に個人的な事象であり、内観 introspection によってのみ観察可能な現象であると考えられている。しかし、デカルトが「動物精気」や「松果腺」を中心とした生理学的概念で情念論を構成しているのとは対照的に、ヒュームの情念論は連合原理を駆使して心理現象の記述を展開するものである。

「情念は直接情念であれ間接情念であれ、苦と快に基づいている。何らかの種類の感情を生むには、ある善や悪を提示することだけが要求されるのである。」(438)

「自負と自卑の情念は単純で一様な印象であり、多くの言葉を用いて、それらに関して、又実際いかなる情念に関しても、正確な定義を述べることは不可能である。我々が敢えてなしうることは、せいぜいそれらに付随する事

情の枚挙による記述である。」(277)

右の二つの引用から分かるように、情念は生理的な快・苦の印象に基づく二次的印象 secondary impression であり、それが想像力による分離を拒むという点では単純印象 simple impression という知覚論上の特性を持っている。情念に「付随する事情の枚挙」とは、それが現れる継起関係の中で本質的な要素を「枚挙」することである。情念の記述が継起関係を中心になされる事は、次の一節からも窺うことができる。

「悲しみと失望とは怒りを、怒りは妬みを、妬みは再び悲しみを生みだす。こうして、それは全体の円環を完結する。同じように我々の気分は、喜びで高揚している時は自然に愛・寛容・憐れみ・勇気・自負そして他の類似の感情に向かう。」(283)

ヒュームの情念は「移行する」印象であり、「長い連鎖」を形成する。言い換えれば「明らかに印象の間には観念の間でと同様に、ある引力、連合が存在する」のである。情念論は、かくして、多様な情念の連鎖を連合原理の駆使によって説明する体系となる。

情念の連鎖を規定する要素は、情念のタイプによって異なるが、「情念の感覚 sensation of passions」即ち快・不快の感覚である。情念の移行は基本的にこの感覚の類似関係をベースにしている。

ここで我々が注目したいのは、情念論の Feeling Theory という性格である。(5) ヒュームの情念論がデカルト的情念観を含むことは先に述べたが、この情念観の特性をケニーは次のように指摘している。

「喜びのような Feeling と、愛のような Emotion、賞賛 (admiration) のような Attitudes、勇気のような徳性 Virtues 及び内気 (bashfulness) のような性格特性 Traits of character との間にカテゴリーの違いが存在してい

ない。……純粋に、心的出来事 mental event として考えられているので、情念と感覚は、ある感覚と別の感覚とが相違する仕方とは別の仕方で、相違するものではない。[6]」

ケニーの指摘する点は『人性論』の中にも見ることができる。

「印象は、特に内省の印象 reflective one は、色・味・香及び他の感覚の質 sensible qualities になぞらえることができるだろう。」(366)

しかし、ヒュームの情念論の主要な対象が「魂の内にある純粋な情動」であり、きわめて受動的であることは、情念と行為との連関を否定することではない。情念と行為との関係が「出来事」間の関係として、因果的関係に置かれることによって、情念の「実践性」は保証されている。

とはいえ、情念論は「快・苦の感覚」の類似性に基づいた情念の連合理論という性格を持っている。換言すれば、「純粋な情動」である情念の移行が情念論の中心的な主題であり、ヒュームの「二重連合の原理」は欲求 desire といった意欲的 conative な情念には基本的に係わらないところに成立している。

共感が受動的な情緒的感染として提示される背景に、上に述べた情念論の性格を見なければならないだろう。確かに、共感は連合原理への還元によって、Passion ではなくなっている。しかし、この場合の Passion は連合原理の適用を受けるアトム的知覚であり、受動的な Feeling を中心とする「心的出来事」という意味を持っている。従って、「共感は情念ではない」と言う場合に、我々はそこに Passion の限定的な意味を含めて言わねばならないのである。

後述するように、ヒュームの共感が Passion として露わになる文脈が『人性論』の内に存在している。この場合、同時にヒュームの「二重連合の原理」に、ある「変更」が加えられている。この事実が何を意味するのかは、ここ

で述べることは出来ないが、少なくともヒュームの情念論が理論的困難に陥ると同時に共感の Passion としての性格づけがなされる文脈は、ヒュームの理解する共感をその連合主義的記述の間から垣間見る絶好の機会を与えてくれるはずである。

三　拡大的共感 Extensive Sympathy

『人性論』第二巻第二部九節は次のような問題提起をもって始まっている。

「愛・優しさ tenderness と同情 pity との混合 mixture、憎しみ hatred・怒りと悪意 malice との混合が常に存在している。しかし、ここで告白しなければならないが、この混合は一見して私の体系に矛盾するように見える。同情は他人の不幸から生まれる不快であり、悪意は快である。従って、同情は当然、他の全ての場合と同様に憎しみを生むはずである。悪意は愛を生むはずである。」(381)

同情と愛、悪意と憎しみの混合は、ヒュームの二重連合の原理の妥当性に関わる仕方で問題になっている。この節の議論は、後にみる「平行方向の原理 principle of parallel direction」の導入とそれについてヒューム自らが想定する「重大な反論」を中心に展開している。そしてこの文脈の中で Passion としての共感は現れてくる。これが拡大的共感である。

(一)　平行方向の原理 Principle of Parallel Direction

平行方向という表現が暗示しているように、この原理は情念のダイナミックな側面、行為との連関から見られた情念の性格に関わっている。それは単に快・苦という、情念の感覚的な規定に関与しない連合原理である。ヒュー

ムは次のように書いている。

「情念の移行を引き起こすには、印象と観念の二重の連合が必要である。一つの関係だけではこの結果〔移行〕を生むには不充分である。しかし、この二重関係の充分な力を知るには次の事を考えねばならない。即ち、何らかの情念の性格を決定するのは、現在の感覚即ち瞬間的な苦痛や快だけでなく、その最初から最後までの全体の傾き・傾向 the whole bent or tendency of it from the biginning to the end でもあるという事を考えねばならない。」(381)

情念の「最初から最後までの全体の傾き・傾向」は、「それらの衝撃あるいは方向 impulses or directions」「行為への方向あるいは傾向」とも表現されているが、これらの特性は「欲望あるいは欲求を伴った感情」にあると言われている。

「ある印象は別の印象に関係づけられる。それは我々がこれまでの場合にずっと想定してきたように、それらの感覚が類似している時ばかりでなく、それらの衝撃あるいは方向が類似し、一致している時にも生ずる。」(381)

このように、欲求間の連合を説明する平行方向の原理の導入によって、ヒュームは先の矛盾を次のように解消している。

「仁愛即ち愛に伴う欲求は愛する人物の幸福の欲求であり不幸の嫌悪である。……さて、同情は他者の幸福の欲求・不幸の嫌悪である。……それ故同情は仁愛に関係付けられる。また仁愛は愛と自然的で根源的な性質 natural and original quality によって結合している。……従ってこの連鎖によって同情という情念は愛と結合するのである。」(382)

同情→愛という連鎖は同情→仁愛を介して成立するのであり、そこに働く原理が平行方向のそれなのである。

しかし、上の説明には反論が生ずる。

「ここで重大な反論が生ずる。……彼〔富者〕の快との共感から愛が生ずる。又、彼〔貧者〕の不快との共感から憎しみが生ずる。……しかし『情念の性格を決定するのは現在の感覚即ち一時的な苦・快ではなく、その最初から最後までの全体の傾向、性向である』ことはたった今私の確立した原則である。この為に同情即ち苦との共感は愛を生んだのである。……それ故、この規則〔平行方向の原理〕が……どうして全体に普及しないのか。何故不快における共感が善意と優しさ以外の情念を生むのか。」(384-5)

苦との共感は一方に於いて憎しみを、他方に於いて愛を生む。前者は類似感覚によって、後者は平行方向によってである。しかし、この説明は「自分が説明しようとする個々の現象に応じて推論方法を変更し、一つの原理から反対の原理へと逃走する」ことであろう。何故同じ「苦との共感」が二つの異なった連合原理の適用を受けるのかという説明が要求されている。

(二) 拡大的共感

「さて私は次のように主張する。不快との共感が弱い時、それは前者の原因によって憎しみあるいは軽蔑を生む。そしてそれが強いときは、後者によって愛あるいは優しさを生むのである。」(385)

「これは極めて明白な議論に基づいた原理である。従ってたとえ何らかの現象の解明にそれが必要でないとしても、それを確立しておくべきだ。」(385)

このようにヒュームは「苦との共感」の内に「強—弱」という契機を見い出し、適用される原理の違う理由を説

明している。さらにこの事を「明白な議論」によって確立すると言い、次のように書いている。

「共感は必ずしも現在の時点に制限されないこと、我々はしばしば現に存在していない、他者の快・苦を伝達によって感ずること、即ち我々が単に想像力によって予見する他者の苦・快を伝達によって感ずること。以上の事は確実である。」(385)

共感対象が「存在しない」情念へと拡張されることによって、ヒュームは「制限された共感 limited sympathy」と「拡大的共感 extensive sympathy」の区分を導く。先の「強〜弱」の区分が「拡大的〜制限された」の区分に置換えられるのである。

拡大的共感は他者の快・苦両面に渡る共感であり、制限された共感は他者の苦との一面的な共感と理解されている。このようにして、ヒュームは二つの「苦との共感」に質的な差異を見い出し、先の反論に答えている。

「仁愛が、それ故、大きな度合いの不幸からあるいは強く共感された不幸から生ずる。憎しみや軽蔑は小さな度合いの、弱く共感された不幸から生ずる。」(387)

拡大的共感には平行方向の原理が、制限された共感には類似感覚の原理が適用されるのである。

ヒュームの拡大的共感に関する議論は以上のように要約されるだろう。しかし、この議論には多くの問題がある。(7) ヒュームの議論が基本的な共感規定を逸脱するそのような記述を含んでいることを、「ヒュームが行ったことの全ては、ちょっとした手品 a little sleight-of-hand である」という表現でマーサーは書いている。マーサーの戸惑いは仁愛と連合する Passion としての共感にあり、それを次のように書いている。

「しかし、ヒュームが拡大的共感をどのように仁愛と関係づけているかは、全く不明確である。……ヒュームは

あたかも同じものであるかの様に書いているが、我々は情念の衝撃 impulse あるいは方向 direction と情念の最初から最後までの傾き・傾向 bent or tendency とを区別しなければならない。[8]」マーサーがこのように衝撃・方向と傾き・傾向とを区分するのは、ヒュームの共感が持つ受動的な性格を保持する仕方で、共感と仁愛の連合を解釈しようとする為である。ここで言われている「情念の衝撃・方向」と「傾き・傾向」はヒュームの仁愛の「二つの」定義に注目したものである。

「仁愛は…愛する人物の幸福の欲求であり、不幸の嫌悪である。」(382)

「仁愛は愛する人物の快から生ずる根源的快であり、その苦から生ずる苦である。」(387)

前者は「方向」による定義であり、後者は「傾き」による定義であるとマーサーは解釈する。それによって、共感と仁愛との連合を次のように解釈している。

「拡大的共感に於いては他人が苦しむなら私も苦しむ。そして、彼が幸福なら私も幸福なのである。従ってこのような共感は印象の二重の対応 double correspondence of impressions と呼ばれ得るものを含んでいる。……その限りでは、一方の「傾き」は他方のそれと類似している。これが意味することは、不快との共感が充分広い場合には、仁愛の傾き・傾向との類似性によって主体の内部に憎しみや嫌悪よりもこの情念〔仁愛〕を喚起するであろうという事である。[9]」

マーサーは仁愛の内に二つの側面を読みとることによって、共感と仁愛の連合を解釈するわけだが、マーサー自身も認めるように、これはヒュームの共感の受動的性格に抵触しないようにする唯一の読み方として、提示されたものである。しかし、これによって共感から仁愛を導くヒュームの議論は仁愛の二つの規定間の関係に移しかえら

れることになる。それについて、しかし、ヒュームは何も語っていない。

「共感を仁愛や憐れみという情念に関係付けようとするヒュームの努力は、もし何かあるとすれば、彼の最初の共感概念が不適切であることを強調するのに役立つだけである。」(10)

共感が拡大的共感として仁愛的な欲求という性格を持つことは、確かに「情念の伝達原理」としての規定に矛盾するものであろう。「原理」である共感が要素的な一個の知覚であることは出来ない。ヒュームは拡大的共感によって何を意味し、何を意図していたのだろう。

四　平行方向の原理と類似感覚の原理〔principle of similar sensation〕

平行方向の原理については、先に簡単に触れた。そこで我々が見たのはこの原理が「行為への傾向を持つ」意欲的な情念に適用されるものであるということであった。マーサーの「方向」と「傾向」との区別も、この原理の適用を共感が受ける際に「欲求」として特徴づけられることを避ける為であった。その意味で、拡大的共感が Passion でありえた背景にこの原理が大きく関わっていると考えられる。

平行方向の原理が働く事態をヒュームは次の様に書いている。

「何らかの動機からある行為をなす決意をした人物は、その動機を強化し、心に対する権威と影響力を持たせるあらゆる他の目的、動機へと自然にかけこむ。何らかの志を確かなものとする為に、我々は利害・名誉・義務からひきだされた動機を捜す。」(382)

右の引用は平行方向の原理による連合が、ある情念を「強化する」仕方での連合という性格を持つ事を示唆してい

る。これは類似感覚による連合が情念の移行という仕方であるのとは対照的であると言えよう。

「この関係〔平行方向〕の範囲を理解する為には、次の事を考えねばならない。即ち、何らかの主要な欲求 principal desire は下位の欲求 subordinate ones ――それらは主要な欲求と結合し、他の欲求が平行している場合はこれらはその事によって主要な欲求に関係付けられる ――を伴っていることがある。かくして、飢え hunger は魂の主要な性向 the principal inclination of the soul であり、食物に接近する欲求は二次的なものとしばしば考えられる。それは先の欲求を満足させる為に絶対に必要だからである。」(394-5)

欲求間に支配的―従属的な関係があるところに平行方向の原理は作用するのであり、これは情念の移行として述べられた類似感覚の連合とは異質な連合と言える。「喜び」と「愛」は連合するが、一方が他方を「強化する」という仕方ではない。

このように、平行方向の原理が含む「情念の方向」という概念が、ヒュームのそれ以前の「連合=移行」の考え方とは本質的に異なる連合観を持っていることは注目すべきだろう。快・苦印象の連鎖ではない、心の傾向性に平行方向の原理は関わっている。ここでは、アトム的知覚の引力が働く契機に知覚の外へ出て、知覚する主体の内にそれを求める仕方で連合を捉えている。換言すれば、快・苦という情念に内在する要素が連合に作用しないところに、ヒュームは「情念の方向」という概念を提示しているのである。

「これらの情念〔悲劇で演じられる不快な情念〕の全体の衝撃は快に変換され、雄弁が我々に引き起こす喜び delight を増すのである。」(11)

「悲しみ、同情、義憤から生ずる衝撃あるいは熱情が、美の感情から新しい方向を受け取る。後者の情念が支配

的な情念であるので、心全体を摑みそして前者を自己へと変換するのである。少なくとも、その本性を変える程強く着色するのである。[12]」

右の引用はエッセー『悲劇について』(Of Tragedy) の一節である。ここでは欲求だけではなく、情念一般に拡張されて「方向」「衝撃」という語が用いられているが、感覚の類似性による連合とは明らかに反する連合を説明するときに、ヒュームは情念が「心」にもたらす衝撃に訴えている。このように「情念の方向」、情念の「優位性」を語る時、ヒュームは知覚を越え、「主体」の概念を提示せざるを得なくなっている。

五　ヒュームの手品

拡大的共感が仁愛と連合する限り、それは情念である。しかし「制限された共感」は情念ではない。ヒュームが「この共感〔制限された共感〕は怒りに関係する」と言う場合、これは「共感された苦の印象」と言い換えることができる。ここでは「情念の伝達原理」という位置は保持されている。しかし、拡大的共感の場合はこの言い換えができなくなる。拡大的共感は「二重の共感」とも呼ばれるように他者の快・苦双方との共感であるが、これを先の場合と同様に「共感された快・苦の印象」と言い換えることは出来ない。この記述には欲求、傾向性という動的性格が欠落しているからである。二つの快・苦経験との共感は、一つの快〔苦〕との共感がそうであるように、他者の幸・不幸に対して中立的である。この事がマーサーによって明確に指摘されたことなのである。感覚による欲求の記述はできないのであり、それをしたヒュームの拡大的共感と仁愛との連合は「手品」と評されたのである。

しかし、その一方でヒュームは拡大的共感の心理学的説明に関しては一貫している。それは観念の連合と活性化

とに還元される心的過程であり、その点で「情緒的感染」と呼ばれる共感と異なるものではない。その意味で、ヒューム自身はこの展開の妥当性を疑わなかったと言えるだろう。情念論を連合主義的な概念枠の中で構成する手続きは守られていたのである。

だが、この展開自体が問題であろう。ヒュームの共感は連合原理への還元によって、その意欲的な側面を充分には展開しきれなかったのである。観念と印象というアトム的知覚とその間に働く引力という概念枠は、基本的に「主体」を一個の知覚とするのに対して、意欲的な性格を共感について語ろうとする時は「主体」が「知覚する者」として知覚の背後へと後退する。主体の関心は知覚という「出来事」へは還元され得ない。この難点をヒュームの共感の「記述」は持っていたのである。それを我々は「平行方向の原理」の導入の内に見てきた。類似感覚の連合とは違い、知覚主体の性向や傾向性への言及を含んでいるという点で、その連合は「移行」という性格を失ったのである。「純粋な情動」の連合にはあれほどヒュームの連合主義的説明が成功したにもかかわらず、欲求・傾向性の連合に関してはその原理の修正を迫られたのと、共感の「情念」化は決して無関係なものではない。ヒュームの共感の連合主義的還元が既にこうした共感を導く背景にあると言える。それはヒュームの共感の心理学的説明に対する、パスモアの批判の内によく示されている。

「この議論は印象と観念について活気以外のあらゆる区別の放棄を意味している。しかし、その場合でも我々の観念は『Xが怒っていること』〔X's being angry〕についてであり、単に怒りについてではない。我々はある特定の人物と共感するのである。従って、どれ程『Xが怒っている』という観念が生き生きとなろうとも、それは私の怒りに変わらない。なぜなら、そのような変化は活気における変化に加えて、内容における変化を含むからであ

る。」(13)

パスモアの批判はヒュームの共感の連合原理への還元がもつ問題を明確に指摘したものである。他者の情緒経験が「観念→印象」という過程によって、「私の」情緒への変化を説明することはその記述に余りにも多くのことを課している。「私」が「いきいきとした知覚」を持つ事は、他者の情緒経験に参与する事に対して必要条件であっても、十分条件ではないだろう。

このように、『人性論』の共感はそれが連合心理学的説明を受けることによって、共感のもつ仁愛的情念としての側面の展開が困難になっている。ヒュームの共感はその最も広い意味で、「情念の伝達原理」と言えるものだが、それは単に情緒的感染の原理に過ぎないという意味ではなく、他者の幸・不幸に参与する情念としての共感をも含んでいる。しかし、この場合の情念は要素的な知覚ではなく、傾向性といった非・出来事的な性格のものである。それ故、ヒュームの情念論には情念としての共感は、前面に現れてこない。ヒュームが情念としての共感を連合原理の上に導こうとしているのは、このような情念論の性格を背景にしていると言える。しかし、それでもヒュームのこの試みは失敗している。拡大的共感という概念によってヒュームは共感の持つ仁愛的な欲求・傾向性という側面を説明しようとしたが、それは手品に終わってしまっている。それは、情念論が知覚する主体を、従って他者の情緒経験に参与する主体を廃したところに成立していたからである。

注

(1) David Hume; A Treatise of Human Nature, edited by L.A. Selby-Bigge (Oxford, 2nd edition, 1978) p. 576.
以下、上掲書からの引用は全て本文中にその頁数を示した。尚、「鏡の比喩」については、上掲書 p. 365 参照。

(2) 以下、『研究』と呼ぶ。

(3) P. Mercer : Sympathy and Ethics — a study of the relationship between sympathy and morality with special reference to Hume's Treatise — Oxford, 1972 chapter 2 参照。
小論で使用されている「情緒的感染」は上掲書から採られた。

(4) 『研究』での以下の脚注は、『人性論』の共感概念と『研究』のそれとを区別させる一節として、よく知られている。
「何故、我々が人間性 humanity あるいは他者との同類感情 fellow-feeling を持つのかを問うほどまで、我々の研究をおしすすめる事は不要である。これが、人間本性における原理であることが経験されることで十分なのである。……これらの原理がもっと単純で、普遍的な原理へと還元されうることは、たとえどんな試みがなされようとも、ありそうにない。」
David Hume : Enquiries concerning the Human Understanding and concerning the Principles of Morals, edited by L.A. Selby-Bigge (Oxford 3rd edition 1975) p.219–220.

(5) William Lyons: Emotion (Cambridge University Press, 1980) p. 2–p. 16 参照。

(6) Anthony Kenny : Action, Emotion and Will (Routledge & Kegan Paul, 1963) p. 12 ff.

(7) Alfred B. Glathe : Hume's Theory of the Passions and Morals (California Univ. Press, 1950) p.59–p. 60.
P. Ardal : Passion and Value in Hume's Treatise (Edinburgh Univ. 1966) p. 65 ff.
John Laird : Hume's Philosophy of Human Nature (Archon Books 1967) p. 201 ff.

(8) Mercer 前掲書 p. 40–1.

(9) ibid., p. 42.

(10) ibid., p. 42.

(11) The Philosophical Works of David Hume (edited by T.H. Green and T.H.Grose, Reprinted in 1964, SCIENTIA VERLAG AALEN, 4 volumes) vol. 3, p. 261.

(12) ibid., p. 261.

(13) J. Passmore : Hume's Intentions (Basic Books INC., New York, 1952) p. 129.

(大学院後期課程学生)